



# 百貨店再生の光と影

特集

# 新生「藤丸」は大丈夫か

建築費が1.5倍に

計画内容の変更の理由について村松社長は、①資材高騰などで当初30億円と見込んでいた建築費が1.5倍以上に膨らんだ、②改修では設計の自由度が制限され、耐用年数や経済合理性など総合的な判断から建て替えの選択に至った、③開業までの5年程度のつなぎとして仮設の商業施設

「藤丸パーク」(仮称)の開業(来夏の開業予定)に目途が立った。以上の3点を挙げて帯広市内の経済人は、「改修が無理なのは、当初からわかっていたはずだ」と、首を傾げる。「改修では耐震補強の『グレース』を設置し

なければならぬため、3階以上のフロアには窓が付けられない。これでは商業施設として活用できないのは、初めから明らかだ」(先の経済人) 一方、仮設商業施設の「藤丸パーク」だが、藤丸(西2南8)の近くの農協連ビル跡(西3南7)の敷地約3300平方メートルに可動式のトレーラーハウスを6台程常設し、十勝の食材などの飲食店や物

老舗百貨店の帯広「藤丸」が、資金繰りに窮し閉店したのが2023年1月。その後、新会社の「藤丸」(本社・帯広市、村松一樹社長、資本金1000万円)が設立され、再建に向けた準備を進めている。ところが、建物を改修して25年秋に開業とする、当初の計画を大幅に変更。10月4日に行われた記者会見で村松社長は「建物を解体して新ビルにし、開業も30年ごろに延期する」旨を発表した。はたして新生「藤丸」は、大丈夫なのか。その舞台裏を探る――。

だが、「藤丸の開業延期の批判をかわすためのガス抜きではないか」と、市民の声は冷ややかだ。

## 3階から上は「白紙」

次に本丸の「藤丸」自体の計画については、地下1階から地上2

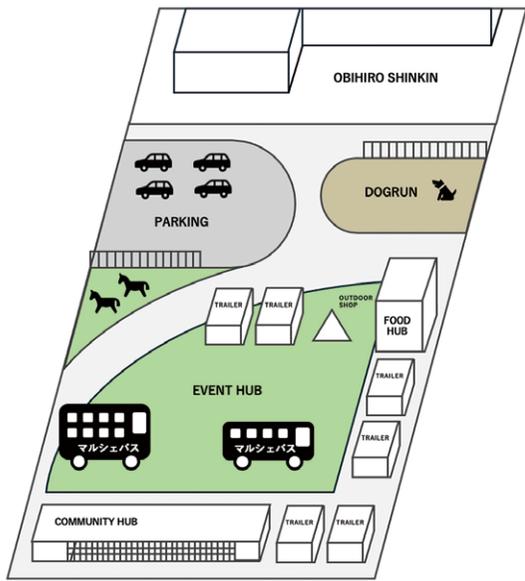
階までの3階層については藤丸が入る計画だが、それ以外は明らかになっていない(図2)。村松社長は、「3階から上はまったく白紙の状態で、何階建てにするのかも決まっていない。来年の夏から解体を始め、解体

完了を27年秋に予定している。その間に複合施設に入るパートナーの方々と話をする」と、説明する。現時点でホテルやマンション、医療関係者からのオファーがあるという。

## 解体費用は国の補助で

では、カネの問題である事業費については、どうか。解体費用については、市を窓口にした国の解体補助金(解体費用の48%)の申請について現在、市と協議しているという。

「旧藤丸は法的整理の可能性が高かったが、法的整理になるとこのエリアが廃墟になる。十勝のランドマークであるこの場所が廃墟になるのを食い止めた」という思いで『そら』が私的整理に持ち込んだ



▲仮設の商業施設「藤丸パーク」のイメージ(図1)



▲「藤丸」の商業施設のイメージ(図2)

販売、美容などのサービス店などが出店。またマルシェやポップアップイベントなどを開

催するほか、ドッグランや「マルシェバス」の配備などを計画している(図1)。

「建て替えを含めた、それ以外の費用の資金調達については、いろいろな方と話をしてい

だ」



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)